

石州瓦屋根 景観は「宝」

絵画コンテスト表彰も

益田らしい景観を後世に受け継ぐための方法を考へる「第3回益田市景観シンポジウム」がこのほど、



絵画コンテストでグランプリに選ばれ、山本浩章市長（左）から表彰を受ける松田都さん（中央）。右は原壮亮君

同市元町の市民学習センターであった。市民ら約90人が講演会を通じて、益田の景観を生かした魅力的なまちづくりの在り方を考えた。

シンポは、昨年12月に「市景観計画」が策定されたのを記念し、市が3年ぶりに開催した。

講演では、浜田高校の阿部志朗教諭が「こんなところに石州瓦」と題し、身近にある石州瓦が北前船で全国各地へ広がったことを紹介。北海道で最も古い1875年創立の小学校の屋根に、石州瓦が使わ

れていることを取り上げた。

また、阿部教諭は「景観は固定されず、時代の容容や人々の意識変化で移り変わる」と解説。「瓦屋根がある景観は間違いなく石見地方の宝」と訴えた。

市景観賞の表彰もあり、絵画コンテストの一般・高校生部門は赤瓦がある街角を描いた松田都さん、益田市、小・中学生部門は歴史のある「太鼓橋」を描写した原壮亮君（12）と益田小6年が、それぞれグランプリに輝いた。

このほか、同市の景観形成に協力、助言を行っている近畿大学建築学部との協同で、祥尚教授が講演した。